

祭のこと

泉鏡太郎

青空文庫

いまでも中六番町の魚屋へ行つて歸つた、家内の話だが、其家の女房が負ぶをして居る、誕生を濟ましたばかりの嬰兒に「みいちやん、お祭は、——お祭は。」と聞くと、小指の先ほどな、小さな鼻を撮んぢやあ、莞爾々々、鼻を撮んぢやあ莞爾々々する。

山王様のお渡りの、猿田彦命の面を覺えたのである。

それから、「お獅子は？ みいちやん。」と聞くと、引掛けて居る半纏の兩袖を引張つて、取つてはかぶり、取つてはかぶりしたさうである。いや、お祭は嬉しいものだ。

——今日は梅雨の雨が、朝から降つて薄ら寒い。……

潮しほは其その時とき々／＼變かはるのであらうが、祭まつりの夜よは、思おも出ひだしても、
 何なん年ねんにも、いつも暗くらいやうに思おもはれる。時じこう候ちやうが丁つゆど梅雨つゆにかゝ

るから、雨あめの降ふらない年としの、月つきある頃ころでも、曇くもるのであらう。ま
 た、大おほ通どりの絹張きぬばりの繪行燈ゑあんどう、横町よこちやう々々／＼の紅あかい軒提燈のきちやうちん
 も、祭禮まつりの夜よは暗やみの方ほうが相應ふさはしい。月つきの紅提燈べにぢやうちんは納涼すゞみに成なる。
 それから、空そらの冴さえた萬燈まんどうは、霜しものお會式ゑしきを思おもはせる。

日ひ中ちゆうの暑あつさに、酒さけは浴あびたり、血ちは煮にえる。御神輿おみこしかつぎは、
 人ひとの氣競きほひがもの凄すごい。

五十人ごじふにん、八十人はちじふにん、百何人ひやくなんにん、ひとかたまりの若わかい衆しゆの顔かほ
 は、目めが据すわり、色いろは血走ちばしり、脣くちびるは青あをく成なつて、前向まへむき、横向よこむき、

うしろ向。むき一つにでつちて、葡萄ぶどうの房ふさに一粒ひとつぶづ、目口鼻めくちなを描かいたやうで、手足てあしの筋すぢは凌霄花のうぜんの緋ひを欺あざむく。

御神輿おみこしの柱はしらの、飾かざりの珊瑚さんごが※と咲さき、銀ぎんの鈴すずが鳴なり据すわつて、鳳ほう凰うわうの翼つばさはとさかか、颯さつと汗あせばむと、彼方あつち此方こつちに揉もむ状さまは團う扇ちの風かぜ、手ての波なみに、ゆらくと乗のつて揺ゆれ、すらりと大地だいちを斜ななに流ながるゝかとすれば、千本せんぼんの腕うでの帆柱ほばしらに、衝つと軒のきの上うへへまつすぐに舞まひ上あがる。……

わつしよ、わつしよ、わつしよ、わつしよ。

もう此この時ときは、人ひとが御神輿おみこしを擔かつぐのではない。龍頭りうとうまた鷓首げきしゅにして、碧丹へきたん、藍紅らんこうを彩いろどる樓船やかたぶねなす御神輿おみこしの方が、います靈れいとともに、人ひとの波なみを思おもふまゝ釣つるのである。

御神輿おみこしは行きゆたい方ほうへ行きゆ、めぐりめぐたい方ほうへめぐめぐる。殆ほとんど人にんげ間業んわざではない。

三社さんじ様の御神輿おみこしが、芳原よしはらを渡わたつた時ときであつた。仲の町なかちやうで、
 或ある引手茶屋ひきてぢやの女房むすめの、久ひさしく煩わづらつて居ゐたのが、祭まつりの景氣けいきに漸やつと起おきて、微ほのかに嬉うれしさうに、しかし悄しよんぼり乎みせと店先たゝずにイんだ。

御神輿おみこしは、あらぬ向むかう側がはを練ねつて、振向ふりむきもしないで四五しごじ十間つけんずつと過すぎる。まく鹽しほも手てに持もつたのに、……あゝ、ながわづらひゆるゑ店みせも寂さびれた、……小兒こどもの時ときから私わたしも鼻ひい鼻き、あちらでも御ご鼻び屑いの御神輿おみこしも見み棄すてて行ゆくか、と肩かたを落おして、ほろりとしつゝ見み送おくると、地震なみが揺ゆつて地ちが動うごき、町まちが此方こち方ちへ傾かたむいたやうに、わツ

と起る聲おここゑと齊ひとしく、御神輿おみこしは大波おほなみを打うつて、どどどと打うつて返かへして、づしんと其處そこの縁臺えんだいに据すわつた。——其その縁臺えんだいがめい込こんで、地つちが二三尺さんじやくばかり掘ほり下さつたと言いふのである。女房にようぼうは即座くざに癒いえて、軒のきの花はなが輝かがいた。

揃そろひの浴衣ゆかたをはじめとして、提ちやう灯うちんの張替はりかへをお出だし置おき下ください、へい、頂いたゞきに出でました。え、張替はりかへをお届とゞけ申まをします。——
軒のきの花はなを掛かけます、と入いりかはり立たちかはる、二三日にさんにちまへ前から、も
う町内ちやうないは親類しんるゐづきあひ。それも可いい。テケテンテケテン、
はや獅子ししが舞まひあるく。

お神樂かぐら囃子ばやし、踊屋をどりや臺たい、町々まちの山車だしの飾かざり、つくりもの、人にんぎ

形、いけ花。造花は、櫻、牡丹、藤、つゝじ。いけ花は、あ

やめ、姫百合、青楓。

こゝに、おみき所と言ふのに、三寶を供へ、樽を据ゑ、緋の

毛氈に青竹の埜、高張提灯、弓張をおし重ねて、積上

げたほど赤々と、暑くたつて構はない。大火鉢に火がくわん

くと熾つて、鐵瓶が、いゝ心持にフツくと湯氣を立て

て居る。銅壺には銚子が並んで、中には泳ぐのがある。老舗の旦

那、新店の若主人、番頭どん、小僧たちも。町内の若

い衆が陣取つて、將棋をさす、碁を打つ。片手づまみの大皿

の鮓は、鐵砲が銃口を揃へ、めざす敵の、山葵のきいた鮪いの

はとくの昔討取られて、遠慮をした海鰻の甘いのが飴のやうに

少々せうくとろけて、蛤はまぐりがはがれて居る。お定きまりの魚軒さしみと言いふと、だ
 いぶ水氣みづけだ立つたとよりは、汗あせを搔かいて、角かどを落おとして、くたくと
 成なつて、つまの新蓼しんたで、青紫蘇あをじそばかり、濃こい緑みどり、紫むらさきに、凜然りんぜんと
 立たつた處ところは、何どうやら晝間御神輿ひるまおみこしをかついだ時のとき、君きみたちの肉にくの
 形かたちに似にて居ゐる。……消か防し手御免らごめんよ。兄哥あにいおこ怒おこるな。金屏風きんびやうぶの鶴つるの
まへ前に、おかめ、ひよつとこ、くりからもんくの膚はだぬぎ、あぐら、
なか中には素すつばだか裸はだかで居ゐるではないか。其處そこが江戸えどだい。お祭まつりだ。
 わつしよい、わつしよい、わつしよい、わつしよい、こらしよい、こらしよい、わ

つしよい、こらしよい、わつしよくくく。

夜よが更ふけると、紅くれなゐの星ほしの流ながるゝやうに、町々まちまちの行燈あんどん、辻つじの
 萬燈まんどう、横町よこちやうの提灯ちやうちんが、一ひとつ消きえ、一ふたつ消きえ、次第しだいに暗くら

く更ふくるまゝに、やゝ近ちかき町まち、遠とほき辻つじに、近ちかきは低ひくく、遠とほきは高たかく、森もりあれば森もりに渡わたり、風かぜあれば風かぜに乗のつて、小兒こどもまじりの聲こゑ々ゝが、

わつしよいく、わつしよいく、わつしよ、

わつしよ、わつしよ、——わつしよ。……

聲こゑある空そらは、ほんのりと、夢ゆめのやうな雲くもに灯ともを包もんで動うごく。……
 ……かゝる時とき、眷屬けんぞくたち三萬さんまん三千さんぜんのお猿さるさんも遊あそぶのらしい。

わつしよ、わつしよ、

わつしよ、わつしよ——くく。……

大正十二年八月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「祭《まつり》のこと」とルビがついていません。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

祭のこと

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>